

平城宮第295次発掘調査（第一次大極殿・西面築地回廊） 現地説明会資料

奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部
平成10年9月26日

1. はじめに

大極殿は、天皇の即位や元旦の朝賀、外国使節の謁見などに用いられた古代の儀礼空間として最も重要な建物でした。平城宮の大極殿は、はじめ朱雀門の真北の高台に建てられ、大極殿や後殿を囲うように築地回廊がめぐらされました。そして聖武天皇が天平12年(740)から天平17年(745)まで平城宮を一旦離れた際、大極殿は恭仁宮に移されました。その後、聖武天皇がふたたび平城宮に戻ってきた時には、新しい大極殿はもとの位置の東側に建てられます。一方、旧地は「西宮」とよばれ、称徳天皇が住みました。さらに平安時代には平城上皇がこの場所に一時住まいをかまえました(図4)。

このように平城宮の大極殿は2回建てられますが、通常、奈良時代前半の大極殿を「第一次大極殿」、還都後を「第二次大極殿」とよんでいます。第一次大極殿院地区は、第69次(1970)・第72次北(1971)調査で発掘されており、それらの調査結果は『平城宮発掘調査報告XI』(1981)としてまとめられています。その際、第一次大極殿も東3/4を検出していますが、今回の平城宮第295次調査は、第一次大極殿の復原をめざし、その全容と周辺地域の様相を明らかにすることを目的として、第一次大極殿の西1/3から西面築地回廊にいたる範囲を発掘しました。調査面積は既発掘部分を含め約2700㎡、6月23日より調査を開始し、現在も継続中です(図1)。

2. 検出した主な遺構

今回検出した主な遺構は、別表10のとおり、基壇付礎石建建物(第一次大極殿)、掘立柱建物18、築地回廊および築地塀、門1、掘立柱塀7、柱列3、溝9、石敷2、石列1、土坑1です(図5)。なお、掘立柱建物の何棟かは足場穴も検出されており、調査区西側で鎌倉時代の掘立柱建物や土坑なども検出しましたが、今回説明は省略します。

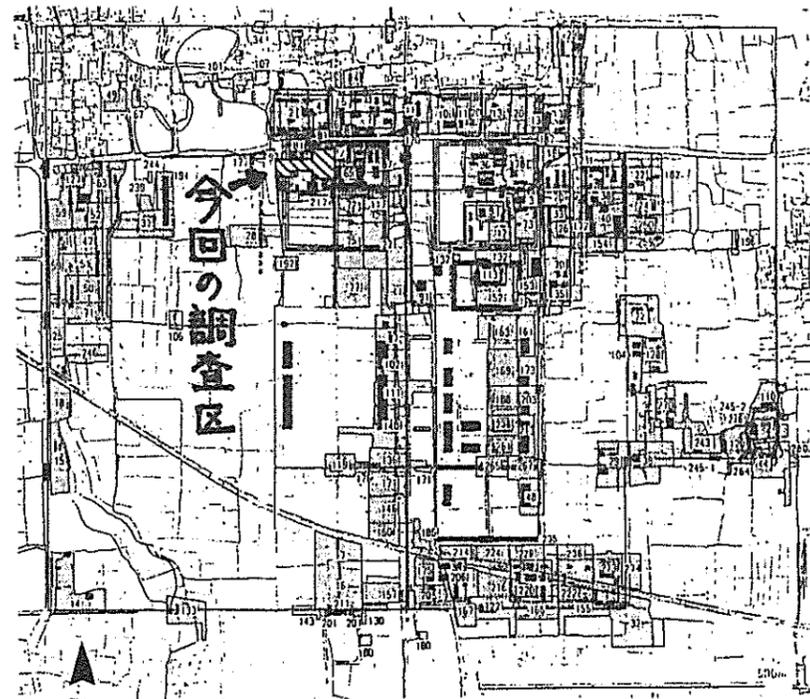


図1 第295次調査区位置図

第一次大極殿院地区の遺構の時期区分に関して、『平城宮発掘調査報告XI』では大きく3時期(I・II・III期)にわけ、第I期は奈良時代前半、第II期は奈良時代後半(平城還都後)、第III期は平安時代初頭(平城上皇期)としています。今回の調査でも、遺構の重複関係や配置などがこれと矛盾しないことがわかりましたので、この時期区分を踏襲し、以下で時期ごとに第一次大極殿院地区と今回の検出遺構について解説します。

大極殿は北から南にのびる舌状丘陵の西傾斜面上に建てられました。大極殿から西面築地回廊にかけては遺構面の標高が約1mほど下がります。しかし建物6まではほとんど遺構面の標高はかわらず、西妻柱列のすぐ西側の段差で東から西へ50cmほど下がり、段差以西でさらにゆるやかに下がっていくことが判明しました。この段差は後世の耕地化にともなうものですが、大極殿の遺構は耕土、床土直下の砂礫層(褐色微砂)の地山面で検出したのに対し、段差の西側は、西に下がる旧地形を反映して砂礫層および粘質土層で整地しており、遺構はその整地層上で検出しました。このような整地は大極殿とほとんど標高差がない東側ではみられなかったものであり、すでに第I期におこなわれたと考えられます。

<第I期 奈良時代前半>

和銅3年(710)に藤原宮から遷都した当初は、東西約177m南北約318mの範囲を築地回廊で囲み大極殿院としました。その内側北寄り1/3は一段高くして中央に第一次大極殿と後殿を建て、南2/3は礫敷き広場として建物を建てず、築地回廊の南面中央に南門を開きました。後に南門両側に楼閣が、院南側に東西各2棟ずつ朝堂が並ぶ朝堂院が付設されましたが、天平12年(740)に恭仁宮遷都の際には、大極殿と東西両面の築地回廊は恭仁宮に移建され、その部分には1本柱塀が造られます。

今回の調査では、基壇付礎石建建物(第一次大極殿)、掘立柱建物2、築地回廊、掘立柱塀1、溝1を検出しました。大極殿については基壇基部に地覆石を据える際に掘られた溝を北面で約18m分、西面で約23m分検出しました。しかし第II期の造成や後世の耕地化でかなり削平されたため、基壇本体や南面の地覆石の据え付け溝は検出できませんでした。溝の幅は約1.3mで、地覆石のみ据えたと考えれば少々幅広であり、地覆石の下でさらに外側にくる延石も一緒に据えた際の溝と推測されます。溝の中には凝灰岩片がみられることから、大極殿の基壇は凝灰岩を用いた壇正積基壇と考えられます(図7)。第72次北調査で検出された溝との心心距離から基壇の規模が東西53.1m×南北28.8mと確定しました(図8)。北面の東端と西面で溝が折れ曲がるのは階段部分で、出は溝の外外で4m(本体は3m前後と推定される)、幅は約5.2mとなります。またその位置は大極殿建物の南から2間目にあたります。東階段は従来の調査で検出されなかったことから、西階段を検出できたことにより基壇高や柱位置がより厳密に推定されるようになりました。

また大極殿基壇の南側に接する建物2と建物3を検出しました。これらの建物の東半部は第69次調査でも検出しており、先の報告書では仮設の舞台か建物と推測しています。とくに建物2では、柱間が他より広がる部分を大極殿の階段の位置と考え、北と同じく南階段も3つあることの根拠としました。ただし建物2の北側柱列と地覆石の据え付け溝は約1.8mしか離れていないため、階段の出を仮に3mとすると建物2と約1.2m重なることになり、階段上に建物がかぶさると考えねばなりません。

先の報告書では、第I期における大極殿院の外郭施設は礎石建の築地回廊とされています(図6)。しかし今回は削平がはげしく築地の本体のみ検出しました。また築地回廊の東側にある南北溝5は、西に下がる地形での水の処理を考慮すると、第一次大極殿院地区の造営にともなう排水路として使われ、後にその位置に築地回廊の東雨落溝が造られたとも考えられます。この他に、築地回廊を恭仁宮に移建した後に、西側柱の位置を踏襲して造られた1本柱塀の柱穴2つもあります。



<第Ⅱ期 奈良時代後半（平城遷都後）>

敷地を東西約177m南北約186mに縮小し、周囲を築地回廊で囲み、その中では北半分の高台に27棟もの掘立柱建物が軒を接するように密に建てられました。建物は敷地の東西を2等分する中軸線を心として、南北に並列する3棟の中心建物群、それらの東西に付設された付属建物群と、大きく3つのブロックにわけられた配置となります。

今回は西の付属建物群を新たに調査し、掘立柱建物11、築地回廊、門1、溝6、石敷1、石列1、土坑1を検出しました。建物6、8、9、10の東側柱はほぼ南北一直線に並び、かつこれらは南北中軸線に関して東の付属建物群と左右対称の位置にあり、規格性の強い配置をしています。また建物6では南の側柱と庇柱の抜き取り穴から瓦が多く出土し、棟など建物の一部に瓦が葺かれていた可能性があります。

西面築地回廊は第Ⅰ期の築地基底を踏襲し、両側に掘立柱の側柱をつけ1間門を開きます。しかし東面築地回廊の側柱は礎石建であり、東西で仕様が異なることは今後検討すべき問題です。門20の位置はほぼ東側の建物群の東西中軸線上にあります。また門20の南の柱掘形を切るように直径30cm弱の礎石が東南隅と西南隅に据えられています。これは門の両端で途切れる築地本体を押さえる「かいのくち」という板壁とそれを支える柱があったことを示しています。溝5の東側には拳大の石を南北に並べた石列24があり、これを境に東に石敷が広がっていることから、ここが旧地表面になることがわかります。

<第Ⅲ期 平安時代初頭（平城上皇期）>

築地回廊が撤去された後の第Ⅱ期の敷地を踏襲し、周囲を築地塀で囲みます。北半分の高台には14棟の掘立柱建物が建っていたと考えられています。

今回の調査では掘立柱建物5、築地塀、掘立柱塀6、柱列3、石敷1、溝2が検出されました。南北中軸線上に中心建物が置かれ、その外側に付属建物や塀が基本的には左右対称に配置されましたが、東と西で遺構が必ずしも対称位置ではなく、東にない遺構が西で見られるなど、第Ⅱ期とはやや異なった様子もうかがえます。建物は庇の出を長くとることを特色とします。建物26や建物27では、庇と比較して身舎の柱穴は小さかったり浅いものが多く、想定位置で身舎の柱穴が検出されない場合もあるなど、身舎と庇の柱穴に違いがみられました。身舎部分のみ盛土をして掘立柱を据えるなど、奈良時代とは異なった特殊な構法を用いたと推測されます。また西面築地塀の東側に石敷があります。これは第Ⅱ期の石敷の上に新たに小石を敷いたもので、石列24を越えて西の築地まで続いています。

3. 出土した遺物

今回の調査では、土器、瓦、金属製品などが出土しました。土器は奈良時代前半のものは少量で、奈良時代後半、平安時代初頭および中世のものが大半でした。金属製品では、建物6の南庇柱東端の抜き取り穴から、6～8本の鉄釘がさびて固まりとなったものが出土しました。

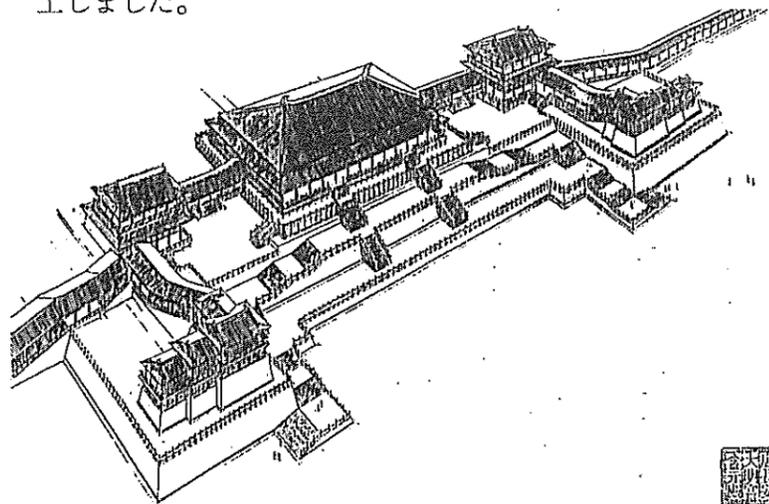


図2 唐長安城大明宮含元殿 復原図

楊 鴻勳
『唐長安城大明宮含元殿復原研究報告』



瓦の場合、軒瓦のほとんどが第Ⅱ期に属し、第Ⅰ期は少量出土したのみで、第Ⅲ期はまったく出土していません。このことから第Ⅰ期に属する瓦は移建時に恭仁宮に移され、第Ⅱ期は建物の一部が瓦葺となり、第Ⅲ期は瓦葺でなかったと推測されます。第Ⅱ期の軒瓦には、軒丸瓦6130B、6133C、6134Aa型式、軒平瓦6718A、6732A・C型式などがみられます。このうち、6133C—6732C型式、6134Aa—6732A型式は、第Ⅱ期の軒瓦のセットとして先の報告書でも指摘されています。しかし今回、建物6の南庇柱の抜き取り穴から、軒丸瓦6130Bと軒平瓦6718Aが出土したため、6130B—6718A型式も新たにセットとなることが推測されます。これら第Ⅱ期の軒瓦のうち、6134Aa型式以外はいずれも京都府相楽郡木津町市坂瓦窯、^{いちさか}上人ヶ平遺跡^{しょうにんがひら}で焼かれたものです。

一方、西面築地回廊周辺でも軒瓦は出土していますが、時期的にどれがセットとなるか、築地全体が瓦で葺かれていたかは今後の検討課題です。

4. まとめ

今回の発掘で、第一次大極殿基壇の規模と西階段の位置が確定し、とくに西階段の位置と出がわかったことは、大極殿の柱位置や基壇の高さの復原に大きな手がかりを与えました。藤原宮や恭仁宮などの大極殿の規模を別表12に示しましたが、東西階段を検出しているのは平城宮第二次大極殿と後期難波宮大極殿のみです。第二次大極殿は階段を地覆石の据え付け溝でなく足場穴から推定していますが、階段は南から2間目で同じです。後期難波宮大極殿は南から1間目に階段がくるため、平城宮の第一次大極殿とは異なります。

第Ⅱ期の西面築地回廊部分では、側柱は掘立柱となり、新たに掘立柱1間門が開くことがわかりました。東面築地回廊の側柱が礎石建であることを踏まえると、側柱の仕様の違いは今後の検討すべき問題です。

大極殿から西面回廊までの間は砂礫と粘質土を交互に敷く整地がされ、築地回廊および築地周辺にも小石が敷かれており、大極殿東側とは様子が異なることがわかりました。また西面回廊周辺で旧地表面が残っているのに対して大極殿周辺は削平されているため、標高差は現状よりさらに広がると考えられます。この標高差を実際どう処理していたかは今後検討せねばなりません。

ところで第一次大極殿は藤原宮から移建されたものか、中国の唐長安城大明宮含元殿の影響を受けているものかなどの問題が指摘されています。これらについても今回の調査結果を踏まえて今後検討する必要があるでしょう。

以上のことから、今回の発掘調査は今後の第一次大極殿の復原はもとより、他の都城の大極殿や中国都城との比較研究などに関しても、重要な資料と問題を提示したといえます。

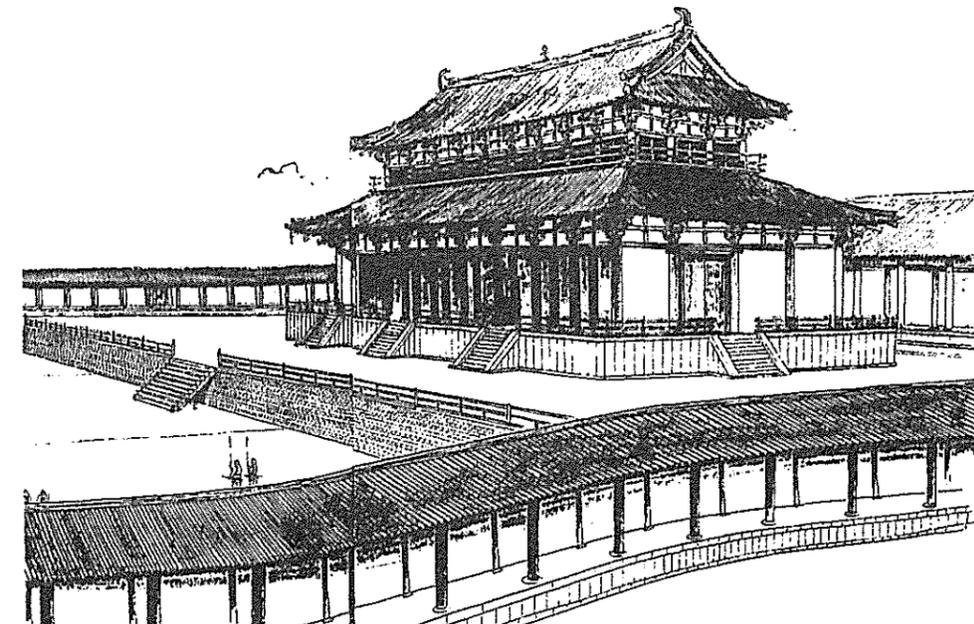


図3 第一次大極殿院 復原図

宮本長二郎・穂積和夫著
日本人はどのように建造物をつくってきたか？
『平城京 古代の都市計画と建築』
草思社、1986

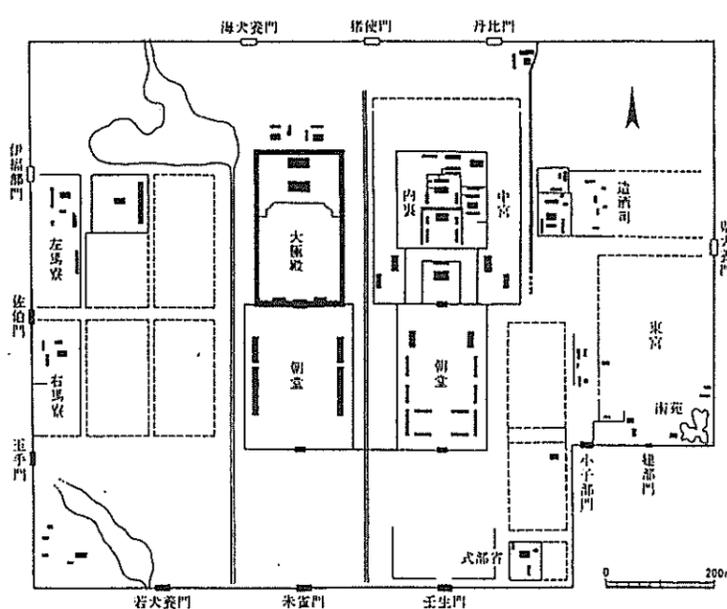


図4 奈良時代前半・後半の平城宮 (小澤毅案)

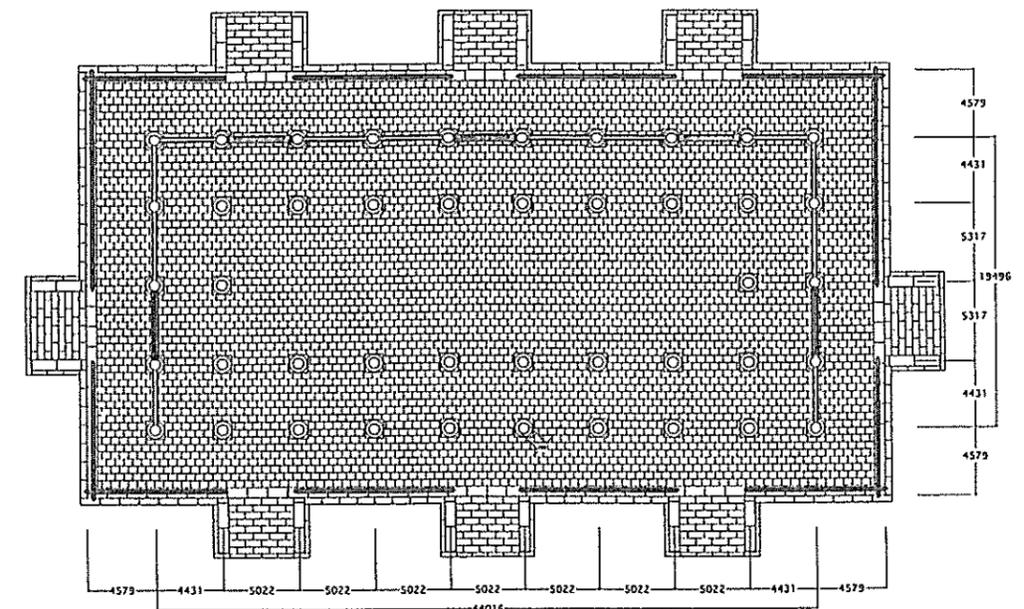
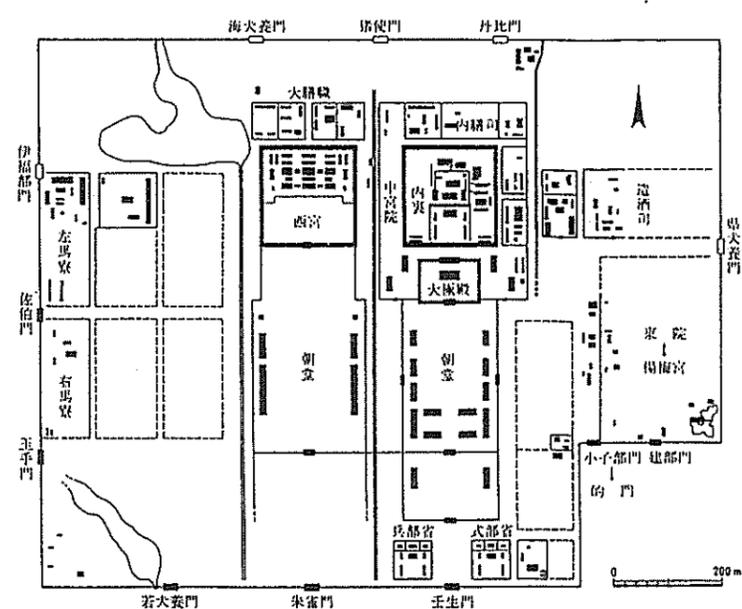


図8 第一次大極殿復原案 平面図 『伝統的木造建造物に関する構造実験報告書』奈良国立文化財研究所, 1997

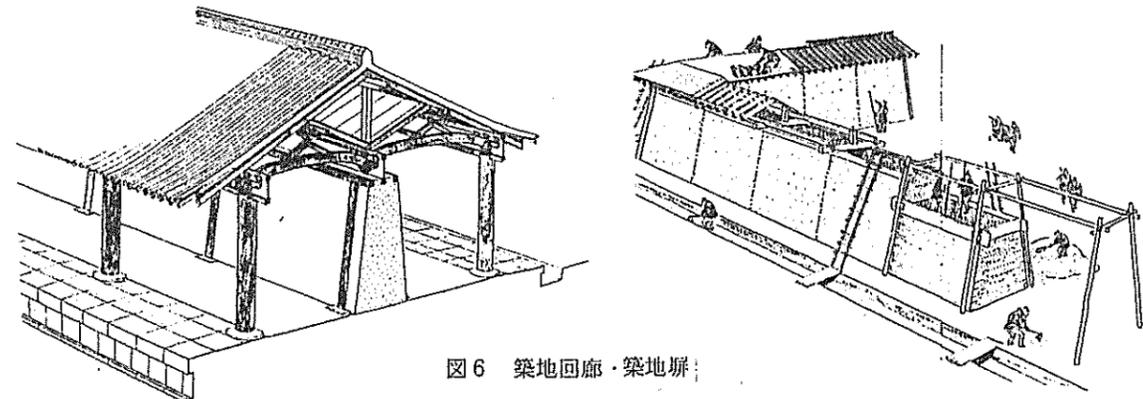


図6 築地回廊・築地塀

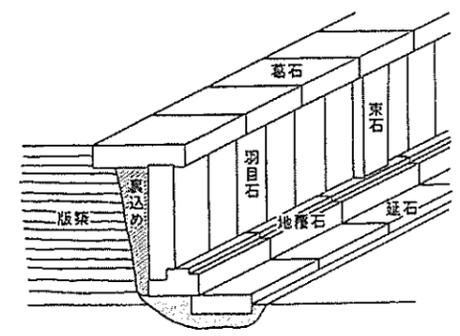


図7 壇正積基壇 模式図

宮本長二郎・穂積和夫著
日本人はどのように建造物をつくってきたか? 『平城京 古代の都市計画と建築』草思社, 1986

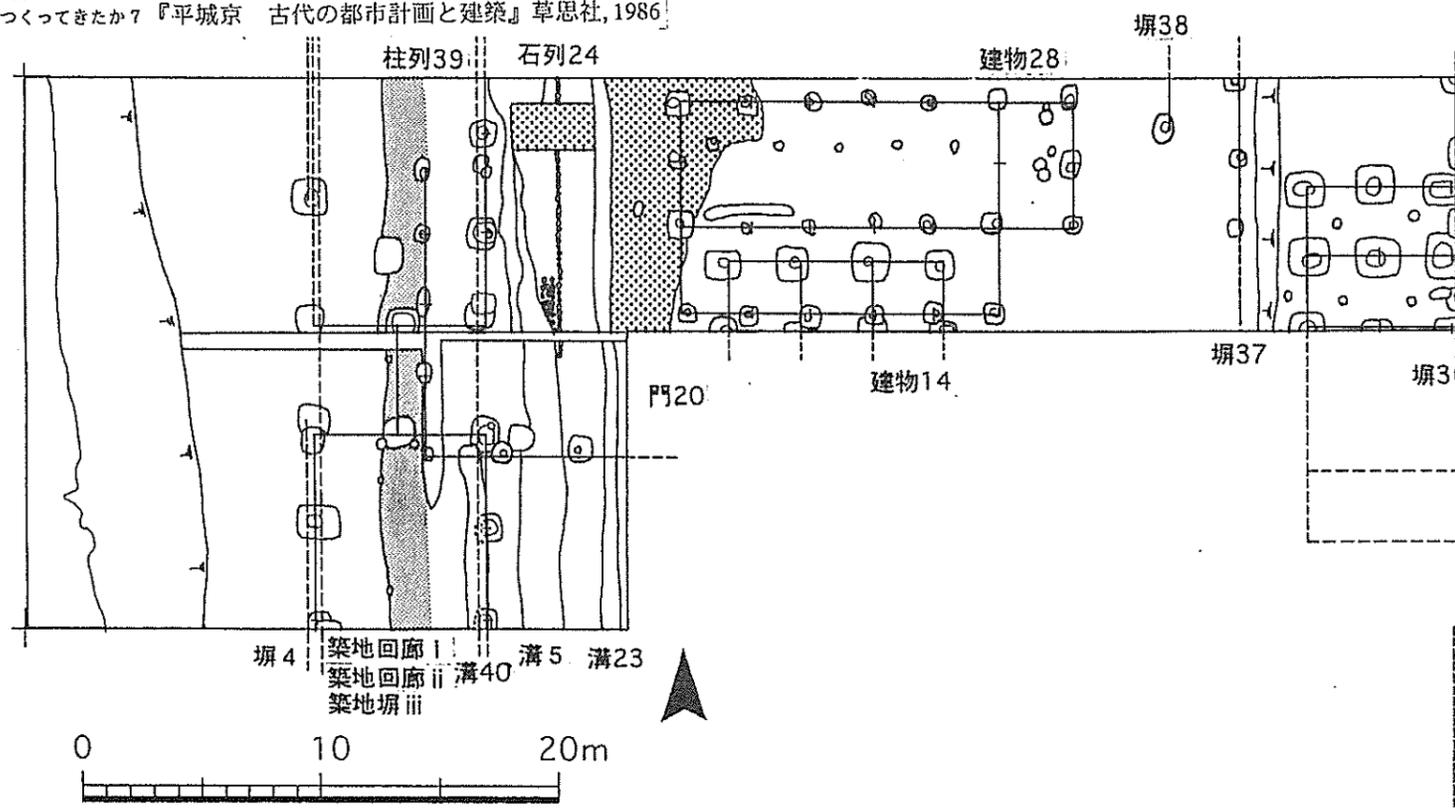
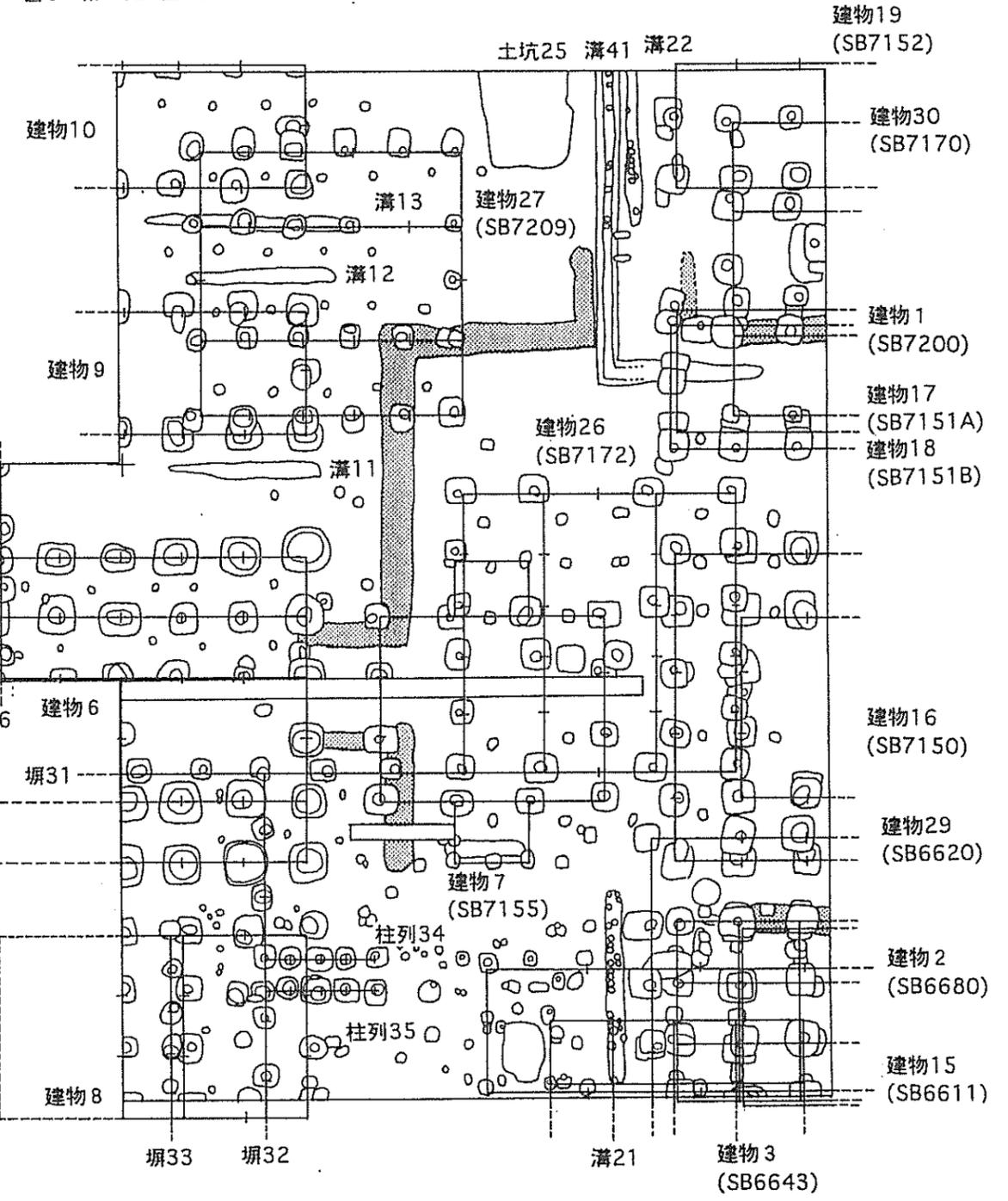
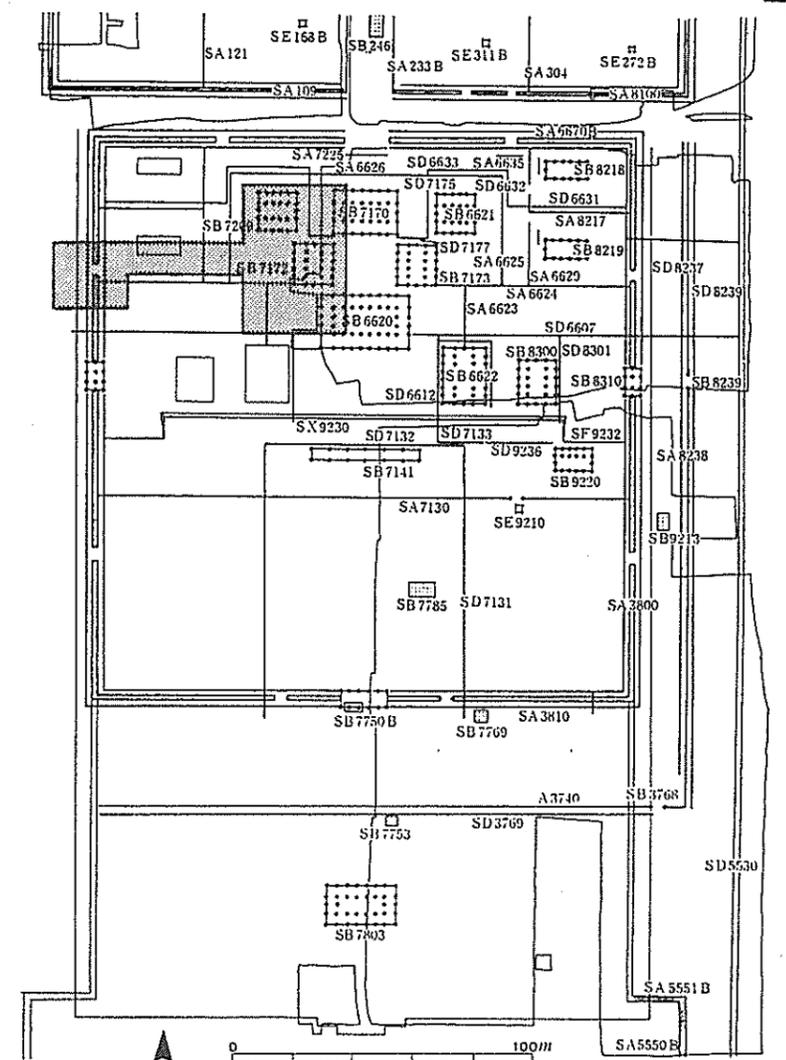
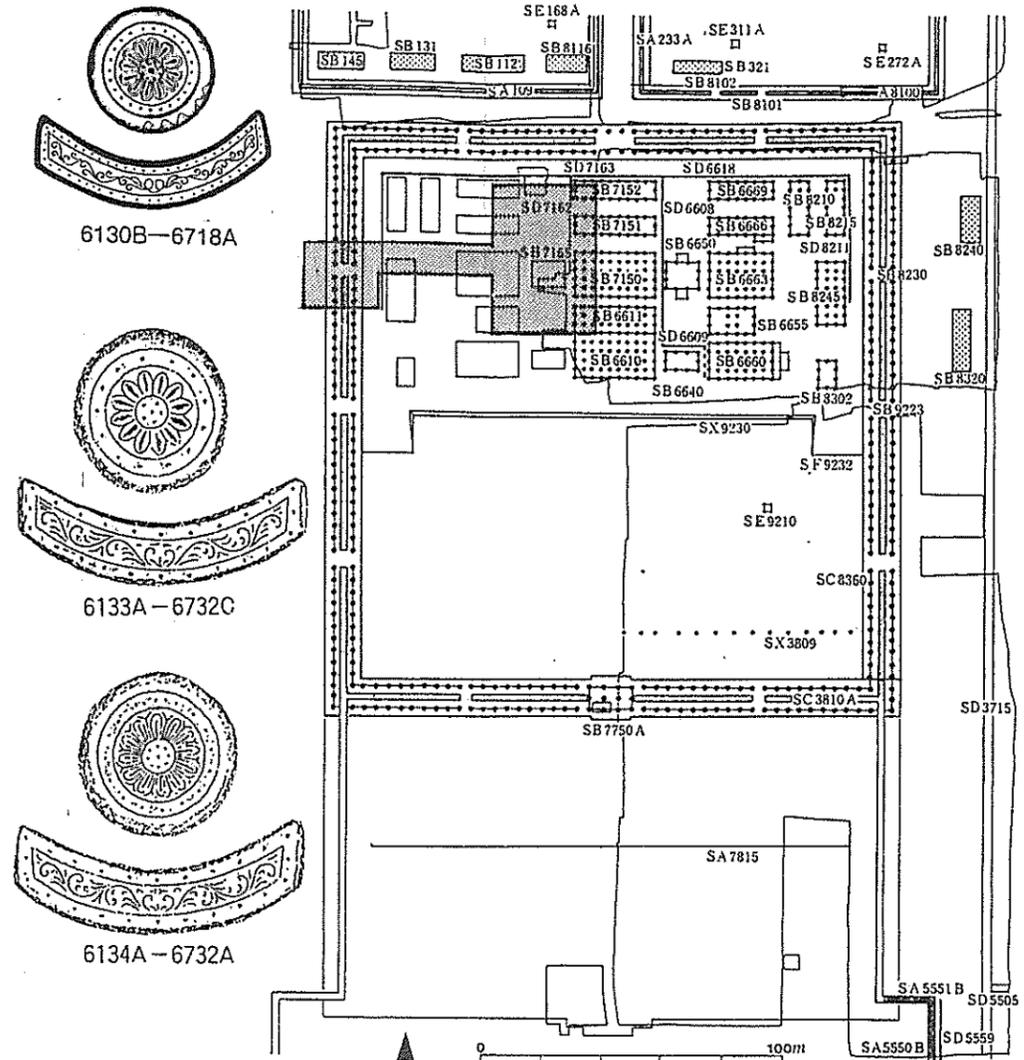
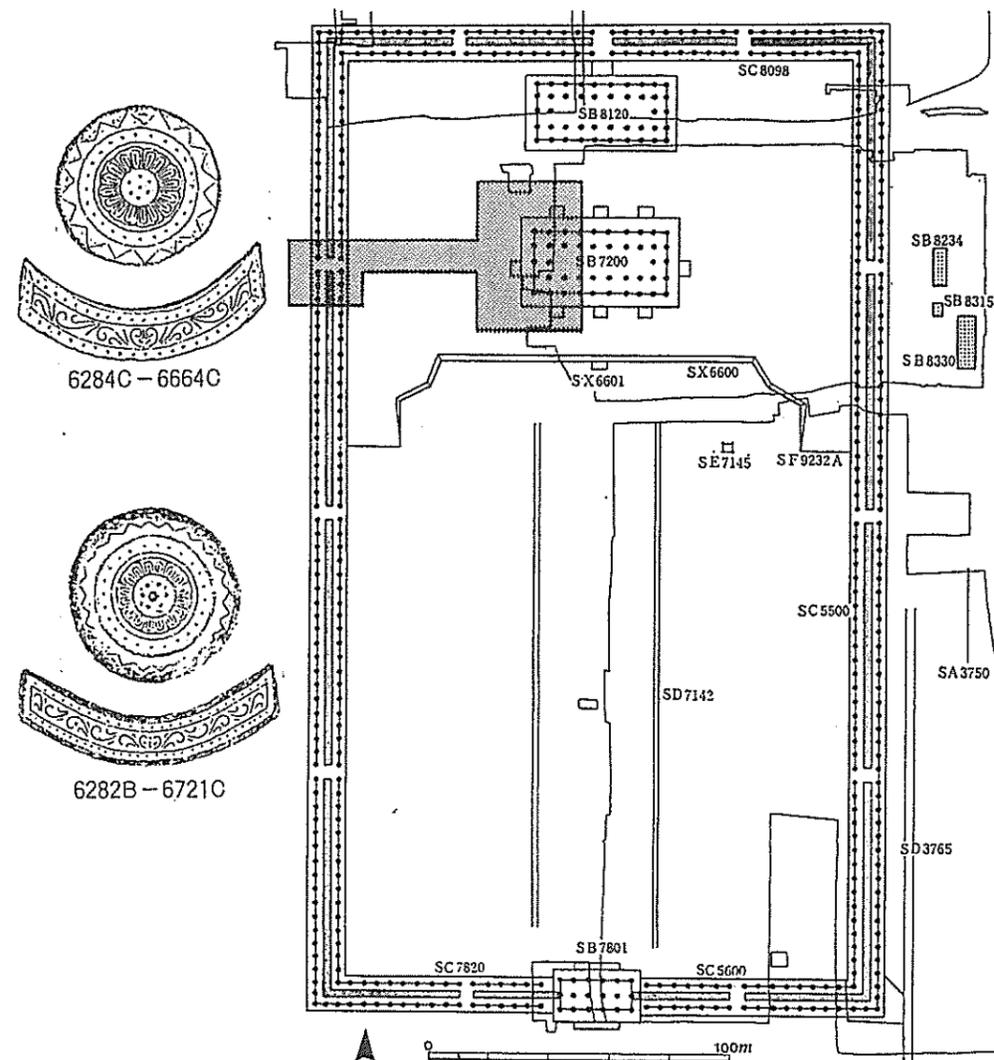
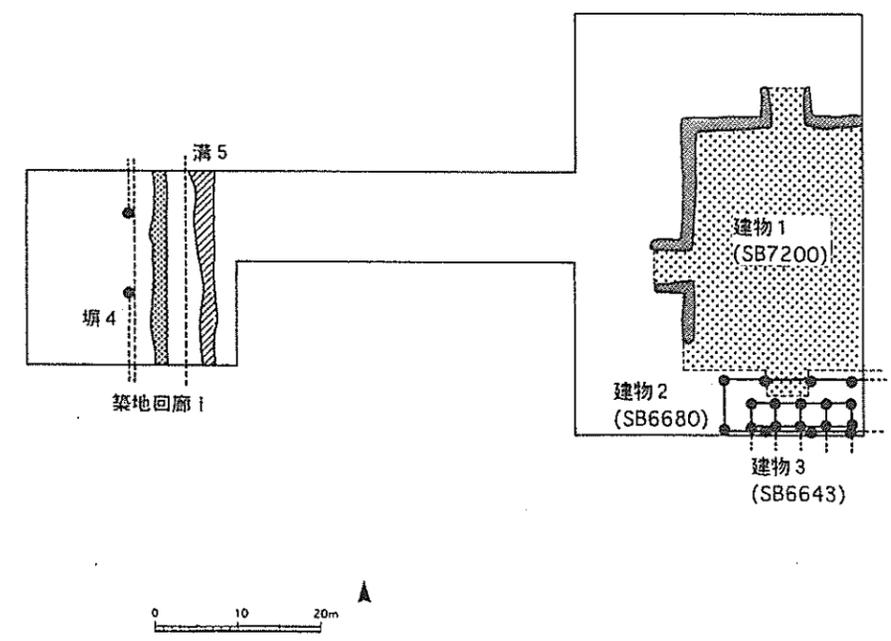


図5 第295次調査遺構配置図

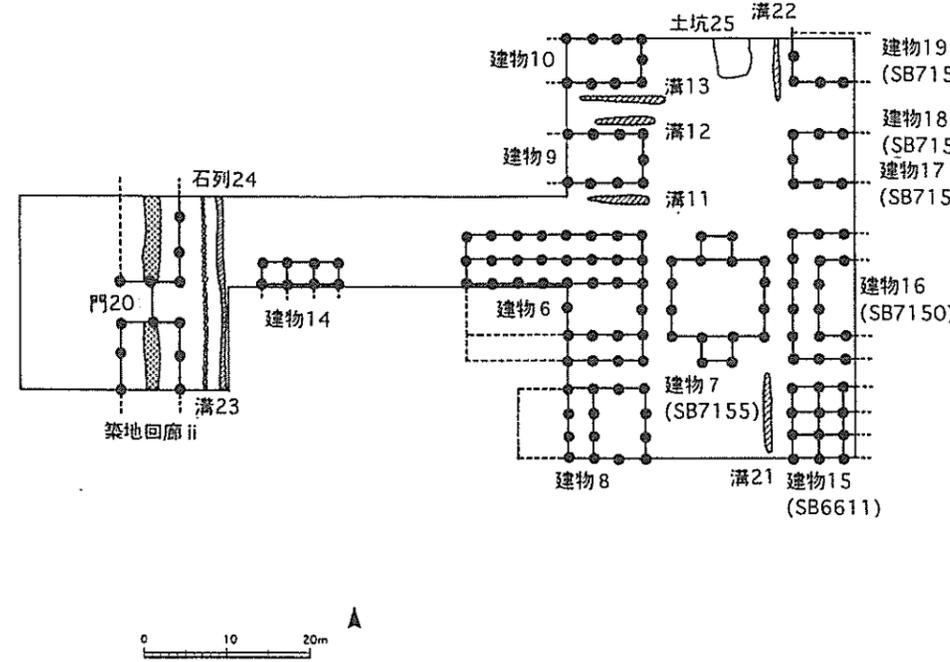




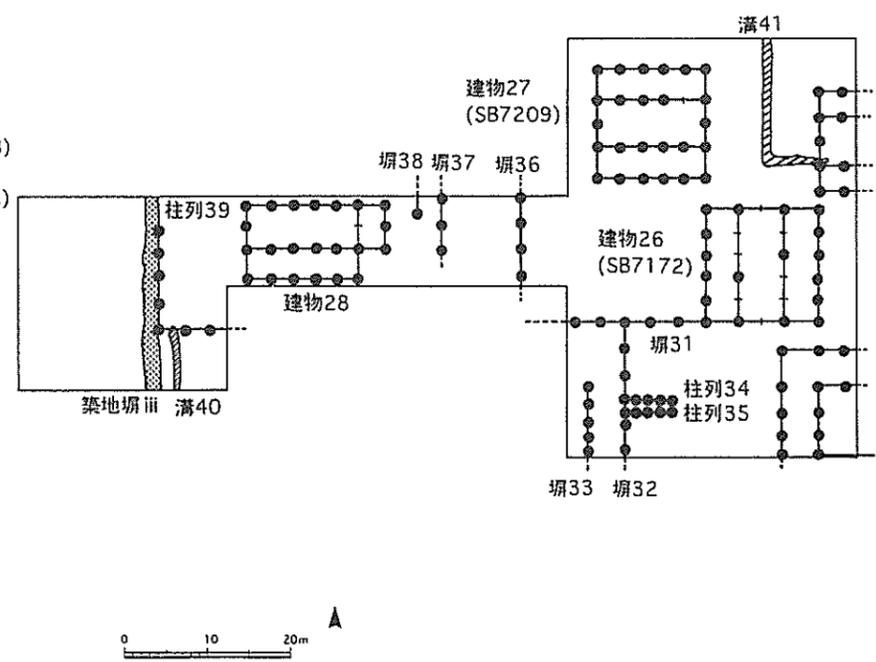
『平城宮発掘調査報告』奈良国立文化財研究所, 1981



第I-1期の主要遺構



第II期の主要遺構



第III-1期の主要遺構

図9 遺構変遷模式図 および 軒瓦セット図

表10 遺構説明表

《今回、検出した遺構》					
時期	遺構名	形式等	規模	検出状況	
I期 奈良時代前半	建物1 (SB7200)	塼付礎石建ち、入母屋、東西棟建物	桁行9間(本体17尺等間、東西の庇部分は15尺)×梁間4間(17尺等間、南北の庇部分は15尺)	西1/4の部分、塼付礎石の据付け溝を検出した。	
	建物2 (SB6680)	掘立柱式、東西棟建物	桁行9間(17尺等間)×梁間1間(20尺)	今回、西端の2間分を新検出した。	
	建物3 (SB6643)	掘立柱式、総柱式、東西棟建物	桁行4間(10尺等間)×梁間3間(10尺等間)	第69次調査(1970)では4間×4間の礎柱式と推定していたが、今回、北側1間分が存在しないことを確認した。	
	築地回廊I	南北築地回廊	築地基礎部：6~7尺	西区中央で南北約23m、本体の築地部分のみを検出した。	
	溝4	掘立柱式、南北塼	柱間寸法31尺	柱穴を2つ検出した。	
II期 奈良時代後半	溝5	築地回廊の東の南北溝	東西幅6~7尺	溝心は築地回廊の築地基礎部心から東に約5mの位置に検出した。	
	建物6	掘立柱式、南北庇付、東西棟建物	桁行7間(10尺等間)×梁間5間(10尺等間)	全体的に柱間形が大きく、南側柱と南庇柱の取除跡に多数の瓦片が投棄されているのを検出。	
	建物7 (SB7155)	掘立柱式、南北中央に土庇が付く、東西棟建物	桁行3間(12尺等間)×梁間1間(10尺等間)、北庇の出1間(9尺)、南庇の出1間(10尺)	第72次北調査(1971)で既に一部を検出、今回、全体を検出した。	
	建物8	掘立柱式、東西棟建物	桁行3間以上(10尺等間)×梁間3間(10尺等間)		
	建物9	掘立柱式、東西棟建物	桁行3間以上(10尺等間)×梁間2間(10尺等間)	柱穴のほか、南北両側に用落溝も検出。	
	建物10	掘立柱式、東西棟建物	桁行3間以上(10尺等間)×梁間2間(10尺等間)	柱穴のほか、南側に用落溝も検出。	
	溝11	建物9の南雨落溝、東西溝	南北幅約2.5尺		
	溝12	建物9の北雨落溝、東西溝	南北幅約2.4尺		
	溝13	建物10の北雨落溝、東西溝	南北幅約1.5尺		
	建物14	総柱式建物	東西3間(10尺等間)×南北1間以上(10尺等間)	北端1間分を検出。	
	築地回廊II	掘立柱式、南北築地回廊	南北柱間13.5尺(ただし1門20の部分のみ15尺)、築地基礎部東西5尺	5間分を検出。	
	門20	掘立柱式、築地回廊に開く門	南北1間門	3間分を検出。	
	溝21	建物15の南雨落溝、南北溝	南北幅約2.5尺	東南部で南北約10mを検出。	
	溝22	建物19の南雨落溝、南北溝	南北幅約1.5尺	溝21の北延長上で調査区東部北端から約8m検出。	
	溝23	建物14の南雨落溝か?、南北溝			
	石列24	溝5の東側に並ぶ南北石列		南北約12mの石列を検出。	
	土坑25	不整形	東西約13尺、南北約16尺	調査区東部北端で検出。	
	III期 平安時代初期	建物26 (SB7172)	掘立柱式、東西庇付、南北棟建物	桁行5間(9尺等間)×梁間2間(9尺等間)、東西庇の出1間(各13尺)	第72次北調査(1971)で既に一部を検出、今回、全体を検出した。
		建物27 (SB7209)	掘立柱式、南北庇付、東西棟建物	桁行4間(8.4尺等間)×梁間3間(9尺等間)、東西庇の出各1間(各12尺)	第72次北調査(1971)で既に一部を検出、今回、全体を検出した。
建物28		掘立柱式、東庇南庇付、東西棟建物	桁行5間(9尺等間)×梁間2間(10尺等間)、東庇の出1間(10尺)、南庇の出1間(12尺)	第87次北調査(1975)で検出したSB8224の西対称の位置に当たる同規模の建物であるが、想定位置よりも西に約3mずれており、SB8224が西面庇であるのに対し、今回は西庇・北庇は検出されなかった。	
築地塼III					
塼31		掘立柱式、東西塼、建物26の南妻柱列から続く	柱間寸法10.5尺等間	4間分を検出、さらに西に伸びて柱列39に繋がると考えられる。	
塼32		掘立柱式、南北塼、塼31で検出した東から3つめの柱から南に伸びる	柱間寸法10尺等間	5間分を検出、さらに南に伸びる。	
塼33		掘立柱式、南北塼、塼32の西4.5m(15尺)の位置で桁行に伸びる	柱間寸法6.5尺等間	4間分を検出、さらに南に伸びる。	
柱列34		掘立柱式、東西柱列、塼32で検出した南から3つめの柱から東に伸びる	柱間寸法1 5尺	4間分を検出、柱間寸法が小さく、塼の作り替えか?	
柱列35		掘立柱式、東西柱列、柱列34の南1.5m(15尺)の位置で桁行に伸びる	柱間寸法4 5尺		
塼36		掘立柱式、南北塼	柱間寸法10尺等間	3間分を検出、南北それぞれにさらに伸びる。	
塼37		掘立柱式、南北塼	柱間寸法10尺等間	南北塼36の西30尺の位置に検出した。	
塼38		掘立柱式、南北塼		塼37の西10尺の位置で柱穴1つを検出、第87次北調査(1975)で検出したSAR225の西対称にあたる塼のものと考えられる。SAR225との比較で、北に伸びるものと考えられる。	
柱列39		掘立柱式、南北柱列	柱間寸法10 11尺	築地塼の東側で4間分を検出した。南端の柱穴は塼31の西延長と繋がる。	
溝40		南北溝、築地塼の東雨落溝(抜き取りか?)	東西幅約3尺	調査区西端南端から南北約7.5mにわたって検出した。	
溝41	1.字形溝	幅約1mで性格不明			

《既発掘調査で検出している遺構》				
時期	遺構名	形式等	規模	検出状況
II期 奈良時代後半	建物15 (SB6611)	掘立柱式、南庇・東庇・西庇付、東西棟建物	桁行5間(10尺等間)×梁間3間(10尺等間)、南庇・東庇・西庇の出各1間(各10尺)	西端から2間分検出。
	建物16 (SB7150)	掘立柱式、四面庇付、東西棟建物	桁行7間(10尺等間)×梁間3間(10尺等間)、庇の出各1間(各10尺)	西端から2間分検出。
	建物17 (SB7151A)	掘立柱式、東西棟建物	桁行9間(10尺等間)×梁間2間(10尺等間)	建物16の北20尺の位置で西端から2間分検出。
	建物18 (SB7151B)	掘立柱式、東西棟建物	桁行9間(10尺等間)×梁間2間(10尺等間)	建物17を南へ約2尺上げて建て替えたもの。
	建物19 (SB7152)	掘立柱式、東西棟建物、西から7つめの柱筋で側柱切り有	桁行9間(10尺等間)×梁間2間(10尺等間)	西端から2間分検出。
III期 平安時代初期	建物29 (SB6620)	掘立柱式、四面庇付、東西棟	桁行7間(10尺等間)×梁間3間(10尺等間)、庇の出各1間(各14尺)	西端から2間分検出。
	建物30 (SB7170)	掘立柱式、南北庇付、東西棟	桁行7間(10尺等間)×梁間2間(10尺等間)、南北庇の出各1間(各14尺)	西端から1間分検出。

表11 第一次大極殿院地区関係年表

(出典のないものは『六国史』による。)

元明	和銅3(710). 1. 1	大極殿に御し受朝。隼人・蝦夷らも参列。…藤原説・平城説あり
	3.10	平城京に遷都。
元正	霊龜1(715). 1. 1	天皇大極殿に御し受朝。
	9. 2	元正天皇、大極殿において即位。
	養老3(719). 1. 2	大極殿に御し受朝。
	神龜1(724). 1. 2	天皇大極殿に御し、受朝。
聖武	神龜1(724). 2. 4	聖武天皇、大極殿において即位。
	神龜4(727). 1. 3	天皇大極殿に御し、受朝。
	神龜5(728). 1. 3	天皇大極殿に御し、王臣百寮及び渤海使ら朝賀す。
	天平1(729). 3. 4	天皇大極殿に御し、授位。
	6.24	天皇大極殿に御す。隼人ら開門で風俗の歌舞を奏す。
	8. 5	天皇大極殿に御し、天平改元を詔す。
	2(730). 1. 2	天皇大極殿に御し、受朝。
	4(732). 1. 1	天皇大極殿に御し、受朝。
	7(735). 8. 8	天皇大極殿に御す。大隅・薩摩の隼人ら方楽を奏す。
	9(737). 10. 26	金光明最勝王経を大極殿で講ず。
	12(740). 1. 1	天皇大極殿に御し、朝賀を受く。渤海使・新羅の学生も参列。
	1.17	天皇大極殿南門に御して、大射を観る。
	9. 3	大宰少弐藤原広嗣叛す。
	12.15	恭仁京に遷都。 この後平城の大極殿と歩廊を壊ち、恭仁京に遷し造る。
	13(741). 1. 16	大極殿に御し、百官の主典以上に宴を賜う(仮殿か)。
	14(742). 1. 1	大極殿未完成のため、四阿殿を仮造し、受朝。
	15(743). 1. 3	天皇大極殿に御し、百官朝賀す。
	17(745). 5. 11	平城京に遷都。
	18(746). 9. 29	恭仁京の大極殿を山背国分寺に施入。
称徳	天平神護1(765). 1. 1	天皇西宮前殿に御し、受朝(南宮前殿とする写本もあり)。
	神護景雲1(767). 8. 8	僧600口を屈して西宮寝殿において設齋す。
	2(768). 11. 22	新嘗祭の豊樂を西宮前殿において設く。
	3(769). 1. 3	法王道鏡西宮前殿に居り、大臣已下拝賀す。
	宝龜1(770). 8. 4	天皇西宮の寝殿で崩御(53歳)。
桓武	延暦3(784). 11. 11	長岡京に遷都。
	13(794). 10. 22	平安京に遷都。
嵯峨	大同4(809). 11. 5	従四位下藤原真夏ら摂津國為奈野や平城旧都などにおいて上皇の宮地を占う(『類聚国史』25)。
	11. 12	従四位上藤原仲成らを遣して平城宮を造る(『日本紀略』)。
	12. 4	平城上皇、平城に幸す。宮殿未完成のため、かりに故右大臣大中臣清麻呂の家に入る。翌年四月頃完成。
淳和	弘仁1(810). 9.	平城上皇、平城遷都を図るも失敗し、剃髮入道す(菓子の姿)。以後も平城宮に居す。
	天長1(824). 7. 7	平城上皇崩御(『日本紀略』)。
	2(825). 11. 23	平城西宮は平城上皇の親王らの自由にすべしとの勅あり(類聚符宣抄巻6)。

表12 諸宮の大極殿・東大寺大仏殿の規模

遺構	建物柱間	建物規模(桁行×梁間)	基礎規模	階段基礎部(幅×出)	基礎高	天壇高(土)
藤原宮	9×4間	149R(44.0m)×64R(18.9m)				
平城宮第一次	9×4間	149R(44.0m)×66R(19.5m)	180R(53.1m)×100R(29.5m)	17R(約5m)×13R(約3~4m)		
		149R(44.0m)×66R(19.5m)	180R(53.1m)×98R(28.8m)	5.2m×(3~4m)		
恭仁宮	9×4間	153R(45.1m)×68R(20.1m)	177R(53.1m)×94R(28.2m)	17R(5.1m)×12R(3.6m)	南辺2.5m、北辺1.8m	土壇北西隅の礎石上面と基礎部間のレベルから
		149R(44.0m)×66R(19.5m)	177R(53.1m)×94R(28.2m)	7×96R(28.2m)		
平城宮第二次	9×4間	129R(38.0m)×54R(15.9m)	155R(45.6m)×80R(23.5m)	15R(4.45m)×12R(3.55m)	3m	残存する礎石と礎石の高低差から
後醍醐天皇宮	9×4間	118R(35.2m)×50R(14.9m)	140R(41.7m)×72R(21.5m)	15R(4.47m,中央)・13.5R(4.02m,左右)×約2.5m	4R(2.4m)	階段の出、礎石の高さ等から
長岡宮	9×4間	121R(36.3m)×55R(16.5m)	138R(41.4m)×72R(21.6m)	15~16R(4.6~4.9m)×2.7m(9尺)	7~9尺	階段の出から
東大寺大仏殿(創建)	11×7間(裳階含む)、9×5間(裳階除く)	290R(86m)×170R(50.5m)(裳階含む) 244R×124R(裳階除く)	327R×206R		7尺	
東大寺大仏殿(現存)	7×5間(裳階含む)	57m×50.5m	68.6m×61.7m			

18宮の大極殿については各発掘報告による。上下2段の階高については、平城宮第一次大極殿の階高は今回の発掘結果により、その他は小沢氏1993『平城宮中央区大極殿地域の建築平面について』による。
東大寺大仏殿(創建) - 上原一・鈴木寛1977『天智の美術・南都七代寺』、相賀敏夫1980『名実日本の美術3巻 東大寺』、朝田幸次は1974『東大寺 大仏と大仏殿』、山崎順1952『東大寺大極殿の第一期彫刻』、
東大寺大仏殿(現存) - 上原一・鈴木寛1977『前掲』、下出浩二1974『建築大辞典』